切り撮る－MY LIFE STYLER
Dwelling　元気な時に住まいを見直す

―バリアフリー設計の道を歩んで半世紀―

「高齢」も「障がい」も個性のひとつ、その人らしい住まい方を提案しています。

―吉田 紗栄子さん

取材・レポート『めづるくらし』研究会 編集部

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催にあわせ、「パラ選手をお茶に呼ぼう！」と、旧知の仲間に呼びかけ、会を設立した吉田さん。

実は、第1回東京オリンピック開催の1964年、大学3年生のときに通訳として活躍した経験をお持ちです。続けてパラリンピックにも日本赤十字社が組織した「語学奉仕団」として参加。

オリンピックの閉会式を終え、パラリンピックの準備が急ピッチで進められていた開村の前夜、代々木の選手村に宿泊しました。そこで、自衛隊の人たちの改造工事を目の当たりに。

「車イスの選手のために入口の階段をスロープにしたり、トイレの扉を払ってカーテンを引いたり。あっという間に障がいのある人のための選手村に早変わり。私は住居学を専攻していましたが、バリアフリーという言葉すらなかった時代です。こういう分野があるんだ！と。卒業論文のテーマを〈車椅子利用者のための設計〉にしました。

それから50年以上のときを経て、公共施設など物理的なバリアフリーは、急速に進んだものの「住宅のバリアフリーは追いつかない。元気なうちに住まいを見直して欲しい。」と嘆きます。

障がい者に対する偏見や差別も完全にはなくならず〈車イスで遊びに来られる住まい〉を提案しても理解者は少なく、歯がゆい思いは続いています。

＊注：「64語学奉仕団のレガシーを伝える会」

吉田 紗栄子　よしだ さえこ

‥1級建築士・バリアフリーコンサルタント

1943年生まれ。日本女子大学住居学科卒業。高校生時代に父親の転勤に伴いイタリア・ローマで生活する。堪能な英語とイタリア語をいかし、大学3年生の時に1964年東京オリンピックでは競技会場の英語通訳、パラリンピックではイタリア選手団の通訳ボランティアを務める。その際の車イスでも不自由なく過ごす選手たちの様子を見て感動し、住まいのバリアフリー設計を一生の仕事に選ぶ。50年以上バリアフリーの家作りに取り組む、バリアフリー建築の先駆者。「JID賞インテリアスペース部門特別賞（1998）」、「第18回 住まいのリフォームコンクール　高齢者・障害者部門優秀賞（2001）」、「日本女子大学第17回 住居の会奨励賞（2015）」などを受賞。主な共著として、『50代リフォーム素敵に自分流－住まいのプラン集（住まいのプラン集－女性建築士による快適住プランの提案）』、『バリアフリー 住まいをつくる物語』など。横浜市在住。

（有）ケアリングデザイン 1級建築士事務所：代表
https://www.caring-design.or.jp/author/saekoyoshida/

NPO 高齢社会の住まいをつくる会：理事長
https://www.kourei-sumai.com/index.html

一般社団法人 64語学奉仕団のレガシーを伝える会：代表理事
（問い合わせ）nabafco_yoshid@yahoo.co.jp

企業の研修などで来日したアジアやアフリカの障がい者をお茶に招き、一般家庭訪問の機会を提供。まさに〈車イスの友達が遊びに来れる住まい〉。

◆ (C) MEDURU KURASHI 2020

『めづるくらし』vol.05 より

パラリンピックこそ、チャンス！「住まいと心のバリアフリー」を。

だからこそ、東京でのオリ・パラ開催が決まったときに第1回のパラリンピックで自らが体験をして得た「心のバリアフリー」を後世に伝えられるチャンス！と、語学奉仕団のOB、OGを結集して「お茶会」の提案をしたのです。

若いときに障がいのある人に接することが偏見のない心を育てる、と活動への参加を若人にも呼びかけています。

「パラリンピックには社会を変えていく力があると思います。これをチャンスに気運をもりあげて欲しい。」とも。

21歳でバリアフリーに出会った吉田さんは25歳のときに結婚。夫の転勤に伴いドイツへ。31歳で出産し生後8か月の娘を連れて帰国。3歳までは自分で育てると決めていたので、仕事復帰は30半ばを過ぎてからになりました。

建築家として油の乗ってきた40歳を迎えたころ、吉田さんは突然〈変形性股関節症〉で歩行困難に陥ります。

「手術を勧められたのですが拒否しました。私の周囲には障がい者が大勢います。杖で歩く位どうってことない！」と。今もトレーニングに通っています。

ドイツで産み、東京で育てた一人娘の愛梨（えり）さんは大学卒業後、結婚してミュンヘンの大学院に夫婦で4年間留学。帰国後は熊本の南阿蘇村にある夫の実家に「農家の嫁」として移住しました。

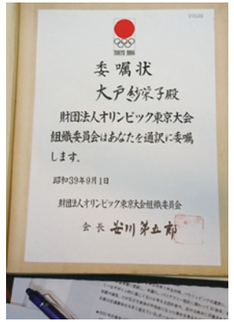
「娘が男の子の双子を筆頭に、4人も孫を生んでくれて（笑）。」女性農家のNPO理事長として活躍し、超多忙の愛梨さんに「将来、介護されたかったらこっちに来て。」と誘われ、吉田さん夫妻は一昨年、娘さんの家から1キロ離れた所に民家を購入しました。

「夫は大自然が気に入って一足先に移住。私は娘が一瞬でも自分の時間を取り戻してくれたら…と、仕事を調整しながら、月のうち1週間は阿蘇に。」

〈高齢も障がいもひとつの個性〉と唱えるバリアフリーの先駆者・吉田さんの個性が阿蘇の住まいにも息づきます。

取材を受ける吉田さんの手元にあるのは、黒い布で装丁を施した55年前の卒業論文。後方の和室には収納も兼ねた「畳」の寛ぎスペースを設け、客人の寝室にも活用。

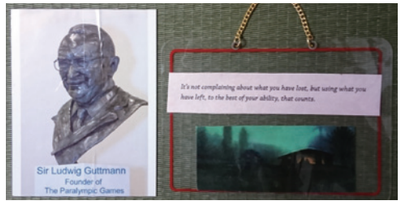
（右）パラリンピック選手村の「通門証」。
（下）イタリア選手団と記念撮影する吉田さん。



（左）1964年のオリンピック東京大会組織委員会よりの通訳の「委嘱状」。（右）新聞記事「第1回 聖火のかげで／よろず相談も覚悟して」より（昭和39年9月4日）。

娘の愛梨さんと孫娘の里咲（りさ）ちゃんが訪れ、笑い声の絶えない至福のひととき。「スープの冷めない距離」に見つけた築45年の民家は居心地満点の終の棲家に。

阿蘇の家のベランダからの眺め。目前に広がる大自然をご夫妻で楽しむ。



パラリンピックの父・英国ストーク・マンデビル病院・脊椎損傷センター所長のルートブィヒ・グッドマンの言葉「失ったものを数えるな、残されたものを最大限生かせ」を吉田さんは〈座右の銘〉として大切にしている。

「農業・農村の魅力や可能性を広げる」ための活動をしている女性農家の方々のエッセイ集『耕す女』。電子書籍版もあり、ネットで好評発売中。

NPO法人田舎のヒロインズ　http://inakano-heroine.jp/sunmoon/

◆ (C) MEDURU KURASHI 2020
『めづるくらし』vol.05 より